翻　訳

ジェラルド・クローソン著「アク・ベシム遺跡―スイヤブ」

山内　和也[※1]・吉田　　豊[※2]

※1･2　帝京大学文化財研究所

訳者前書き

ジェラルド・クローソン著
「アク・ベシム遺跡―スイヤブ」

補説

訳者前書き

本稿は、Gerard Clauson, “Ak Beshim - Suyab”, *Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*, No. 1/2, Apr., 1961, pp.1-13 の全訳である。

1961年にジェラルド・クローソンによって発表されたこの論文は、キルギス共和国北部、チュー川流域に位置する都市遺跡アク・ベシムが、中国文献に現れる「素葉城」や「素葉水城」、「砕葉」、アラビア語・ペルシア語文献に現れる「スイヤブ Sūyāb」に比定されることを明確に提示したもので、アク・ベシム遺跡、つまりスイヤブの研究において記念碑ともいうべき論文となっている。

1884年にこの遺跡を訪れた V.V. バルトリド以来、この遺跡はカラハン朝の都であったバラサグンであるとみなされ、1939～40年に発掘調査を行った A.N. ベルンシュタムもまたこの遺跡がバラサグンであることを疑うことはしなかった。これに対して、クローソンは、1953～1954年に L.R. クズラソフによって率いられたアク・ベシム遺跡の発掘調査の結果、そしておもにシャヴァンヌの研究成果を基に、アク・ベシム遺跡が古代のスイヤブであることを明らかにした。つまり、この論文によって、アク・ベシム遺跡、つまりスイヤブ研究の新たな正しい道筋が示されることとなり、その意味でクローソンの論文は高く評価できる。

とはいえ、1961年に発表された論文であるため、現在、私たちが手にしている情報によれば、いくつかの誤りが見受けられる。例えば、クローソンは、748年に北庭節度使の王正見が「大雲寺」を建設し、その大雲寺が第１仏教寺院にあたると認識している点である。また、クローソンが遺跡の年代等の根拠としている O.I. スミルノヴァによるコインの研究に関しても、検討すべき課題が数多く残されている。

ジェラルド・クローソン卿は、1891年４月28日生まれで 1974年５月１日に83歳で亡くなった。若くしてその語学の才能を発揮し、優れた論文を発表して、数々の賞を獲得した。彼の論文が最初に発表されたのは 1906年のことである。その論文は、パーリ語の短いテキストに関する「A new Kammavācā」というもので、*Journal of the Pali Text Society*（1906-7, pp.1-7）に掲載された。その後、第１次世界大戦がはじまると、軍に歩兵士官として参加し、1940年から1951年に引退するまで植民地省の次官補として活躍した。軍籍にあったときはもとより、引退後も研究者として活躍し、とりわけテュルク語、モンゴル語、ツングース語の研究を積極的に行い、いわゆる「アルタイ学」の確立と発展に大きく貢献した。クローソンの業績は数多いが、そのなかでも、*Turkish and Mongolian studies,* Royal Asiatic Society, Prize Publication Fund Vol. XX, 1962 と彼が晩年に出版した *An Etymological Dictionary of Pre-thirteenth century Turkish*（Oxford, 1972）はとりわけ重要であり、今日に至るまでアルタイ語研究の基本的かつ必要不可欠な文献となっている。

クローソンの生涯とその功績については以下の文献を参照されたい。

V.L. Ménage, Obituary Sir Gerard Clauson, *Journal of the Royal Asiatic Society*, Volume 107 , Issue 2 , April 1975 , pp. 215-217.

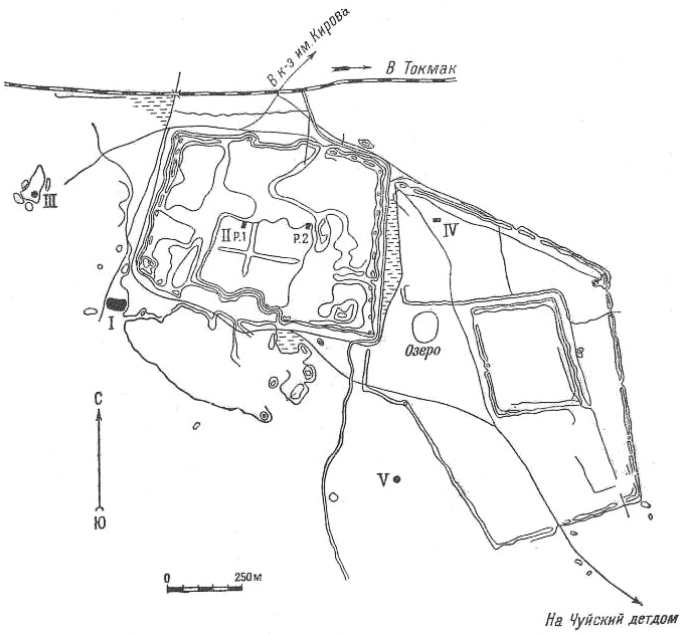
C.E. Bosworth, Obituaries, Sir Gerard Clauson（1891-1973[ママ]), *Bulletin (British Society for Middle Eastern Studies)*, Vol. 1, No. 1.（1974）, pp. 39-40.

A. Róna-Tas, In Memoriam Sir Gerard Clauson, l891-1974, *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*, Tomus XXIX（3）, p.393（1975）

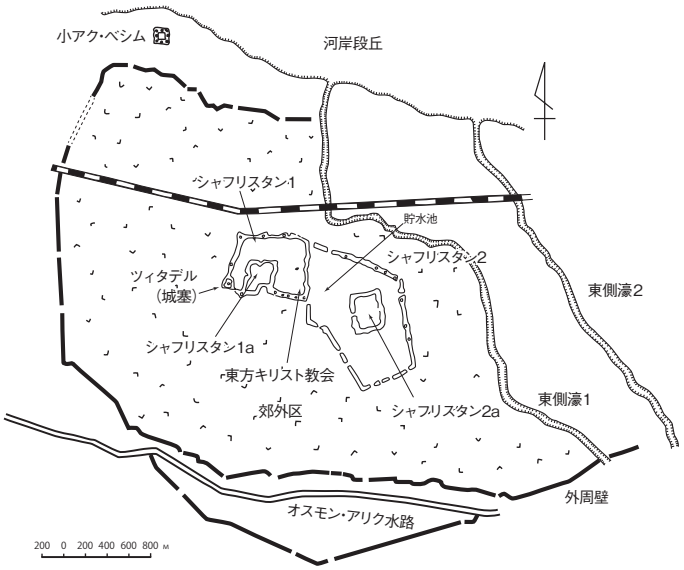
Bosworth, C. Edmund ed. Sir Gerard Clauson, *A Century of British Orientalists, 1902-2001*, British Academy, 2001, pp.88-100.

さいごになるが、この翻訳の下訳は鷹野ほなみが行ない、山内和也と吉田豊が修正および加筆を行ったものである。本文中の［　］は、補訳として山内と吉田が追加したものである。また、必要に応じて訳註を付した。

本研究は JSPS 科研費 JP21H04984（基盤研究(s)）（研究課題名：シルクロードの国際交易都市スイヤブの成立と変遷―農耕都市空間と遊牧民世界の共存―、研究代表者：山内和也）の助成を受けたものである。

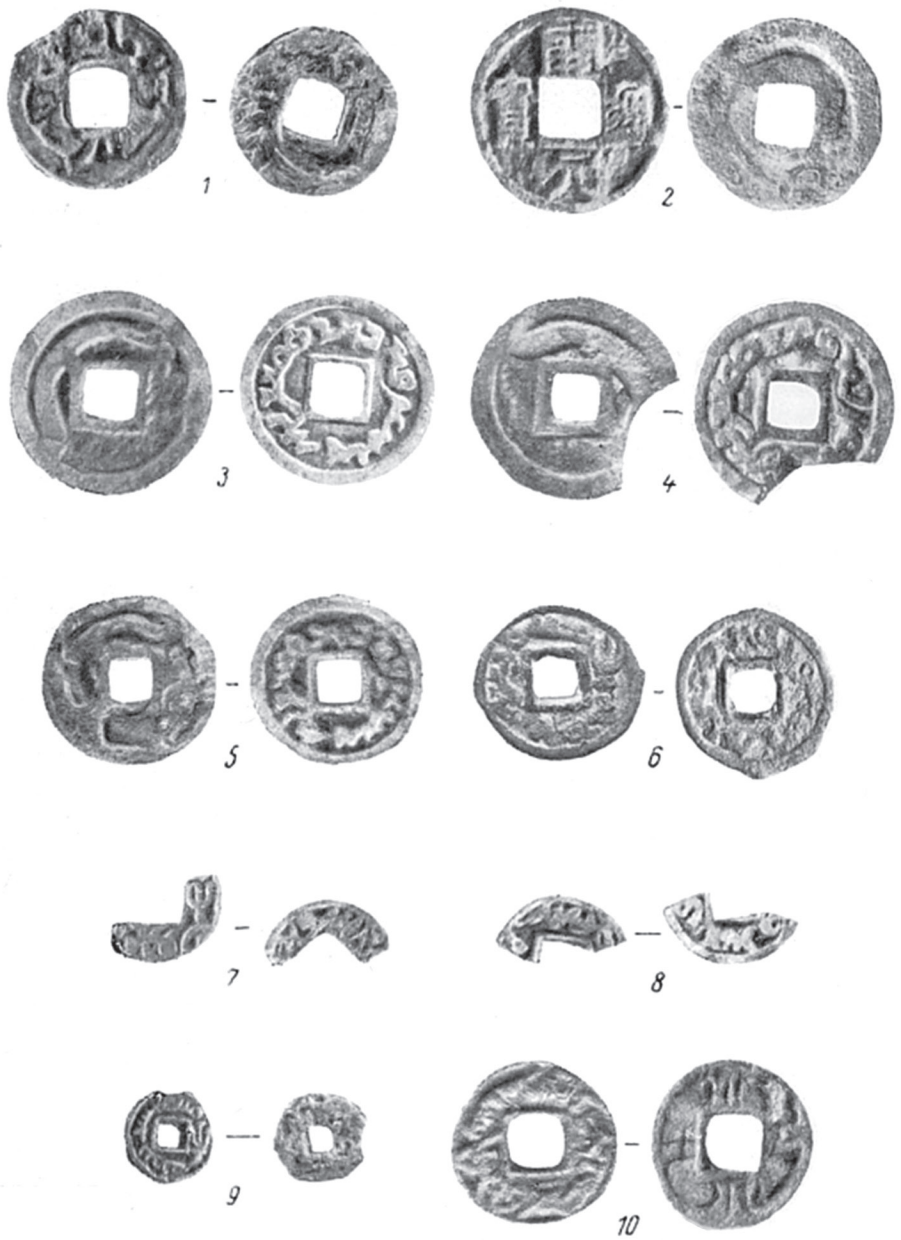


補図１　クズラソフによるアク・ベシム遺跡地図と発掘地点
(Л.Р. Кызласов, О.И. Смирнова, А.М.Щербак, Монеты из раскопок городища Ак-Бешим (Киргизская ССР) в 1953-1954 гг., Ученые записки Института Востоковедения, vol. xvi, 1958, p. 518



補図２　アク・ベシム遺跡の全体図および呼称名

補図３　アク・ベシム遺跡の発掘地点番号（2019年作成）



Монеты из городища Ак-Бешим.

1—2 — китайские монеты династии Тан; *3—5* — монеты тюргешские (тип I); *6—8* — монеты круга тюргешских (тип II); *9* — монета круга тюргешских (тип III); *10* — монета круга тюргешских (тип IV).

補図４．クズラソフによるアク・ベシム遺跡の発掘で出土したコイン

ジェラルド・クローソン著
「アク・ベシム遺跡―スイヤブ」[1)]

モスクワでの国際東洋学者会議は、ソビエトの考古学者らによる新しい重要な発見に対して西側の学者らの関心を向けさせるのに非常にふさわしい機会を与え、それと同時にソビエトの研究者たちに、彼らのいくつかの発見に対する新しい解釈を提案する機会にもなったように思われた。

バラサグン Balasağun という都市の存続期間は短いが輝かしいものであった。伝統的には、バラサグンは10世紀半ばの少し前にカラハン朝の創始者によって建設されたと言われており、バラサグンとカシュガルは11世紀と12世紀においてカラハン朝の２つの都であった。そこ［バラサグン］は、歴史上最初のトルコ語の偉大な文学作品であるクタドゥグ・ビリグ Kutadğu Bilig の著者が生まれ、活動した場所である。紀元後1210年には、カラキタイ（西遼）の軍勢による16日間の包囲に堪えたが、最終的にはその厚い壁が破られ、３日間にわたり略奪された。そしてこの恐ろしい出来事の間に47,000人の住民の命が失われた。モンゴル人による侵略がその後すぐに続き、それ以降、バラサグンは歴史の上で役割を果たすことはなく、実際上は消滅したも同然であっただろう。その名称は、その時以降、ムスリム［イスラーム教徒］の地理学者らの記述の中で、数世紀にわたり存続し続けたが、その場所に関する彼らの記述は著しく異なっていて、彼らがその位置はおろか、その存在についてすらも正確な知識を持っていなかったことが明らかにわかるほどである。

19世紀になると、その位置は近代の研究者らの興味を掻き立て始めた。例えば、1898年にロンドンで出版された N. Elia and D. Ross, *A History of the Moghuls of Central Asia*の361ページ以下に、この問題に関する長い注釈がある。その注釈では明確な結論には至らなかったが、その当時、バラサグンはカシュガルの北、そしてイシク・クルの西に位置し、おそらくチュー川流域のどこか、つまり、北緯 43 度、東経74度と76度の間あたりに位置していたという結論は一般的に支持されており、現在でも支持されていると私は考えている。

1893～1894年、バルトリド V.V. Barthold 教授は中央アジアへの有名な旅の間に、トクマク Tokmak（北緯42度50分、東経75度30分）の南西約５マイル［約８㎞］、チュー川の南岸にあって現在アク・ベシムと呼ばれる大きな古代遺跡を発見した。そして、この偉大かつ慎重な学者らしく、相応の留保条件を付けて、それがバラサグンの廃墟だろうという見解を示した。1927年にはマッソン M.E. Masson が、1929年にはテレノーシュキン A.I. Terenozhkin がその遺跡を訪れ、1938～1940年にはベルンシュタム A.N. Bernshtam の指揮の下で、セミレチエ考古学調査隊がそこで小規模な調査を行なった。その調査の結果は、ベルンシュタム自身は、常々情意が冷静な判断を上回ってしまいがちなところがあり、その遺跡がバラサグンであると自分で納得してしまったのだが、この見解が何年もの間、ソビエト連邦内で公認のものとされてきたようである。西側の研究者たちは、当然ながらこの見解を受け入れている。これはソビエトの考古学者たちの膨大な成果に遅れずについていくのに、西洋の研究者たちはしばしば困難を感じているところもあるからなのだが、次の点に関して注意が必要である。すなわち、今やこの学説は明確に覆され、従来と同様、現在もバラサグンが何処であるかは大きな謎のままなのである。もちろん，ソビエトの考古学者たちは、彼らが取り組まなければならない広大な地域に相応しい規模の踏査や発掘のプログラムを余念なく行っているのだから、やがてはその答えを見つけ出すであろう。

このことは、もちろん、アク・ベシム遺跡が、取るに足らないつまらない遺跡であるということを意味しているのではない。まったく逆である。*Uchëniye Zapiski Instituta Vostokovedeniya*［*Ученые записки Института Востоковедения*］, vol. xvi, 1958 には、アク・ベシム遺跡に関する非常に重要な３本の論文がセットで掲載されている。[訳註1)]

その最初の論文は、クズラソフ R. Kyzlasov によってこの遺跡で 1953～1954年に行われた発掘調査に関する概要の説明である。［この調査は］クズラソフ自身が率いた、ソビエト科学アカデミーのキルギス考古・民族誌総合踏査団のチュー川流域考古学特別班によって実施された。この遺跡はとても広大であり、クズラソフは、彼が行った発掘はまだまだ始まりでしかないことをほのめかしている。その遺跡は、事実上３つの区域に分かれている。遺跡の中心はほぼ長方形の城塞都市であり、稜堡を備えた巨大な壁に囲まれ、約86エーカー［348,000㎡］に及ぶ。その東側には、同じように壁で囲まれた約148エー

カー［599,000㎡］に及ぶ郊外区が隣接しているが、その壁は中心の遺跡のそれほど巨大ではない。[訳註2)] これらすべての城壁とその城壁に囲われた建物は、pisé-de-terre、つまり日干しレンガで建てられたものであり、現在では形状を持たない、たんなる土の丘となっている。

その町と郊外区は、防御された区画と言い表すのが極めてふさわしい地域の北側の中心に位置している。[訳註3)]［というのも、この地域の］北側はチュー川の切り立った南岸で、東側にはチュー川に向かって北へと延びる深い谷があり、城塞都市を中心として、南側と西側はその谷から［チュー川の］川岸まで半径約１マイル［約 1.6㎞］の弧を描くように構築された長い壁で区切られている。明らかに、ここはかつて大きく、そして重要な場所であったに違いない。

発掘には、城塞都市の中心と、その城壁の外側に位置するが、かなり城壁に近い場所にある４つの丘の５か所が選ばれた。それらは以下のようなものであった。

(1) 都市の内部では、遺跡の層序を明確にするために２つの大きな立坑が掘られた。[訳註4)] １つは 14 × 6m、深さ 8.5m であり、［上から］7.5m は文化層であり、確認用の最後［最下層］の 1m は自然堆積層であった。もう１つは、最初のものを確認するためのもので、3 × 3m、深さは最初のもの程ではない。この２つの立坑は、積み重なる建物の複合体を抜けて下方へと続き、上下に重なり合う建物は、それ以前の壊れた建物のすぐ上に載っていた。４つの層位が区分され、最初のものの年代は５～６世紀で、最後のものは９～10世紀であった。

(2) 都市の南西の角のすぐ外側にある約85×35メートルに及ぶ丘は完全に発掘され、８世紀後半の何らかの年代に火災があり、その後荒廃した仏教寺院であることが明らかとなった。[訳註5)] ９～10世紀にはこの遺跡の一部に住み着く人もいたが、それは町が復活したというわけではなく11世紀には放棄された。

(3) 都市の約300ヤード［約270メートル］西にある丘が発掘され墓域であることが明らかとなった。その年代は、７～８世紀に比定できる。[訳註6)] その丘の中心部分は、埋葬に先立って死体が骨だけになるように安置したレンガ造りの基壇であり、おそらくゾロアスター教、あるいはそれと同じような風習に従っていたのであろう。これ［レンガ造りの基壇］は、人骨を収めた広口の素焼きの瓶を埋めた多くの墓と２つの共同地下納骨施設に囲まれていた。瓶のなかの拾い集められた人骨はヨーロッパ人種のものであった。

(4) 郊外区の北部、都市から東に100ヤード［91m］のところにある丘が発掘され、８世紀のキリスト教会であることが明らかとなった。[訳註7)] その教会は、類似するものがアルメニアや小アジアに存在するタイプである。ドーム天井の内陣と礼拝堂や、そこに接しているが独立した洗礼堂（か？）があり、その西側には屋根付きの柱廊に囲まれる屋根のない中庭が隣接していた。中庭の中およびそこに隣接して、数多くのヨーロッパ人種の遺体が埋められており、そのうちの何体かは青銅製のペクトラルクロス［胸につける十字架］を身に着けていた。

(5) 最後になるが、都市の南側で郊外区から西に200ヤード［180m］のところにある小さな丘が発掘された。その結果、ここは小さな長方形の形をした城もしくは要塞化された邸宅で、６世紀か７世紀のものであることが明らかとなった。[訳註8)]

さまざまな位層や建物の年代は、コインや土器類、そしてその他の年代を特定できる遺物によって確定された。それらより後の時代のもので、現代の地表面もしくはそのすぐ下で見つかった土器やコインといったいくつかの散発的な発見物は、寺院［第１仏教寺院］の上層の瓦礫の中にあった11世紀の第２四半期に属する76点からなる小型の一括出土コインを含め、非常に小規模ではあるが、11世紀にはこの遺跡に人がふたたび住んでいたことを示している。

スミルノヴァ O. I. Smirnova 教授による２つ目の論文には、発見されたコインの一覧が載っており、それらのコインから生じる数多くの論点について論じられている。シェルバク A. M. Shcherbak 教授による最後の論文では、トルコ学的な観点からそれらのコインの銘について論じられているが、一見して２番目の論文を参照せずに書かれたようである。

この遺跡の歴史はかなり明白なものである。最初は、５世紀あるいは６世紀に商人たち、おそらくソグド人であろう、で構成された小さな共同体によって交易の拠点として占有されていたようだ。その町は大きくなり、ある時代には頑丈な防御壁で囲まれることになった。人口はさらに増加し、ついには町の周囲に防御を固めた郊外区を付け足さなければならないことになった。[訳註9)] そしてさまざまな宗教の建造物が建てられた。その後、一度ならず侵略や略奪を

受け、バラサグンが建設されたまさに10世紀頃には都市として存続しなくなった。クズラソフは、この遺跡がバラサグンではあり得ず、さらなる調査によって名前が分かるまでは無名のままでなければならないということを指摘して彼の論説を終えている。

しかしながら、彼が整理してきた事実がすでにその答えを提示している、と私はあえて言いたい。考古学者たちによって推測されたアク・ベシム遺跡の歴史は、まさに歴史学者たちによって記録されている有名な都市スイヤブの歴史であり、私の提案は、ごく簡単に言うと、アク・ベシム遺跡はスイヤブであるということである。

実際のところ、この提案は完全に私のオリジナルなものであるというわけではない。この時代における中央アジアの歴史に関する標準的な典拠は、E. Chavannes, *Documents sur les Tou-kiue (Turcs) Occidentaux,* St. Petersburg 1900［1903の誤植］であり、これ以下、私はこの研究書をごく自由に参照して記している。「(p.28)」に言及というのは、この本に言及したものである。シャヴァンヌ Chavannes は、p.10や他のページにおいてつねにスイヤブをトクマクとみなしており、アク・ベシム遺跡はトクマクの近くにある唯一の重要な古代遺跡であると思われる；それゆえ、この比定が何年も前になされていなかったことはかなり驚くべきことである。

スイヤブという名前は Su-yeh［素葉］あるいは Sui-yeh［砕葉］という綴りで中国の文献に頻繁に現れている（Giles, *A Chinese English Dictionary,* No. 10,348, もしくは No. 10,416 および No. 12,997）[訳註10]。カールグレン Karlgren の Ancient Chinese（7 世紀に話されていた方言の一つ）では、「素」suo-（Grammata Serica 68）、あるいは「砕」suậi-（G.S. 490n)、「葉」i̯äp（G.S. 633a）と再建されている[訳註11]。しかし理由ははっきりしないが、シャヴァンヌはこれらの漢字を Sou-［素］あるいは Soei-che［砕葉］と表記しており（p.359）、これは Souj（すなわち Suzh）という発音を表していたと示唆している[訳註12]。スイヤブという名前は、一見すると地域の名前として、ときには独立形で現れるように見えるが、より頻繁には川の名前として Su-（Sui-）yeh shui［素（砕）葉水］（Giles 10,128［水］）の組み合わせ、あるいは町の名前として Su-（Sui-）yeh ch'eng［素（砕）葉城］（Giles 763［城］）、または Su-（Sui-）yeh shui ch'eng［素（砕）葉水城］といった組み合わせで現れる。Suo-（Suâi-）i̯äp という中古漢語の発音とアラビア語の表記 Sūyāb（Minorsky, *Ḥudud al-'Ālam,* E. J. W. Gibb Memorial, New Series xi, London, 1937, Index A を参照）とが同一であることから、この地名がそのように発音されるということが明らかになるし、シャヴァンヌの *Souj* という転写は誤りであることも明らかになる。川の名前として使用されるとき、それがチュー川を表しているというのは疑いようがない。その名前［Sūyāb］は、現地の名前である Chu を表す Su（Suy）と、「水、川」を表すペルシア語の āb に分解されるはずだということが提唱されてきた；しかし、ここには音声学上難しい問題が生じる。というのも、初頭に ch- を持つ漢字がごく普通に存在する中国語で、外国語の語頭の ch- を s- で始まる漢字によって表すことは非常に不自然なことであるからだ。

チュー川流域は、アレクサンドロフスキー Alexandrovski 山脈[訳註13]の高い頂きが連なる巨大な山塊によってフェルガナとソグディアナから、また天山山脈によって新疆から隔てられている。この流域は古代世界においてもっとも辺鄙な場所の１つであり、紀元後１千年紀の歴史は漢文文献に完全に依存しているが、その１千年紀の前半は中国の知識さえ及ばなかった。紀元前２世紀にはイシク･クル盆地、すなわち少なくともチュー川流域東部は、おそらく中国人が烏孫 Wu-sun と呼ぶ謎めいた民族によって占められていた。この烏孫はおそらくインド・ヨーロッパ語族で、もしかしたら北イラン人であったかもしれないとされるが、それ以外のことはほとんど何も知られていない。紀元後５世紀には、その地域は柔然 Juan-juan の「帝国」の一部であったといわれているが、柔然はおそらくトルコ語を話す遊牧民族であったから、遊牧民の支配者が変わっても定住民は大きく変化しなかったようである[訳註14]。６世紀半ばには、その帝国は突厥 T'u-küe（Türkü）によって滅ぼされ、次の世紀の間は突厥の領土の一部として残った[訳註15]。柔然を打ち負かしたすぐ後に突厥は２つの集団に分かれたが、この２つは歴史上では西突厥と北突厥[訳註16]として知られている。西突厥は、それぞれ５つの部族からなる２つに集団に分けられる結束の緩い10の部族［十姓］からなる連合体であり、いずれにしても『旧唐書』には７世紀半ばにはスイヤブはこれら２つの集団の境界にあったということが記録されている（Chavannes, p.28）。柔然を撃破した後

のほぼ100年間、突厥は強大な権力を振い、絶えず王朝が入れ替わる当時の中国に頻繁にその意向を押しつける立場にあった（p.259 以下）。転換期は、紀元後630年、唐朝が権力を奪い取り、中国で社会秩序を回復したすぐ後にやってきた（p.264）。その年に彼らは北突厥を制圧し、その後すぐに西突厥に目を向けた。紀元後648年には、彼らは遠く西に進出し亀茲の王を征服した（p.113 脚註）。そして、この地域の領土を支配するために安西都護府（「安西」は「［中国］西部の平定」を意味する）の体制の構築に取りかかった。スイヤブは紀元後655年の出来事に関連して言及されており（p.35 脚註）、紀元後658年の出来事に関する記事において、安西都護府の行政上の機構を言い表すために「四鎮」という語がはじめて使用された（p.113 脚註）。四鎮は、もともと亀茲、カシュガル、ホータン、スイヤブであったことから、この時までにはスイヤブは確固として中国の領土のなかに位置していたに違いない。[訳註17)]

この後すぐにチベットから登場した吐蕃［チベット人］がはじめて北へと侵攻し、紀元後670年には唐［中国人］は四鎮を放棄しなければならなかった（p.113 脚註）。その後は非常に混乱した戦いの時期が続き、詳細にたどることは不可能であるが、いくつかの年代については記録が残されている。紀元後670年から数年後、吏部侍郎の裴行倹 Pei Hsien-chien はチュー川流域の秩序を回復し、スイヤブの近くで親吐蕃の突厥の首領を捕らえ、紀元後679年には、彼の推薦で安西都護に任命された王方翼 Wang Fang-i がスイヤブの都市の周りに防壁を建設した（p.75 脚註）。その作業が50日で終了したということや、町の４面には、曲がり角や迂回路を使って巧妙に隠されていた門がそれぞれ３か所あった（つまり、ヨーロッパの城郭の説明では「屈曲した入り口」と呼ばれるもの）ということが伝えられている。この説明から、クズラソフの概略図に示されているようなアク・ベシムの町の壁とそっくりな記述を読み取ることができ、これらの壁が安西都護の王方翼によって建てられたものであるという点になんら疑いはない。[訳註18)] その後も唐と吐蕃の間ではさらに入り乱れた戦いが続いたが、突厥の諸部族も双方の側にたって参戦した。この間、唐はスイヤブを保持していたようだ、というのは、この頃スイヤブは数年間にわたる包囲攻撃に耐え、その間、［唐の］駐屯軍は大きな苦難を被ったことが記録されているからである（p.188）。紀元後692年には、唐は吐蕃に対して大勝利を収めて安西四鎮をふたたび設置した。実を結ばない和平交渉が続き、さらに戦いもあった。その間、紀元後 700 年にはスイヤブを奪還しなければならないことがあったことから、スイヤブで反乱が起こったようである（p.282）。

７世紀末までは、西突厥の正統の王族は存続し、おそらく名目上は支配も続けたが、西突厥の主導権は事実上、西突厥の10部族の内の東側の５部族［東方咄陸（とつりく）五部］の１つである突騎施（とっきし） Türgesh［テュルゲシュ］の手に落ちた。もちろん突騎施は遊牧民であり都市民ではなく、その最高指導者は、この頃は可汗の称号を帯びており、チュー川流域に主たる宿営地［牙帳（がちょう）；大牙］を置き、さらに遠く東のイリ川流域に従属的な宿営地［小牙］を置いた（p.79）。

またこの頃、さらに東方で新しい進展があった。北突厥は50年もの間、中国に服従する臣下であったが、中国の軛から脱し、強力な可汗を輩出した傑出した家系［阿史那氏］の指導者のもと、強大な軍事力としてふたたび登場することになった（p.282）［突厥第２可汗国］。紀元後699年、彼ら［突厥第２可汗国］は西突厥国を正式に併合し、おそらく正統の可汗と突騎施の可汗の双方の首長となった（p.282）。しかしながら、突騎施はこの新しい体制に満足せず、中国の宮廷との直接的な接触を維持し、このような方法で突騎施にとっての２つの君主たちをお互いに争わせるように仕向けた（p.79）。この計画は成功せず、まもなく突騎施は両者と反りが合わなくなり、紀元後711年、北突厥は突騎施の可汗を捕らえて処刑した（p.83、p.283）。このことが引き金になって、紀元後714年、唐は正統な西突厥の可汗の側に立って軍事介入を行い、反乱を起こした部族長のうちの１人を殺した（p.77）。唐と北突厥の間の大乱戦はそれからも続く可能性はあったのだが、紀元後716年に北突厥の可汗が死に、彼の後継者はしばらく西に介入する状況にはなかった。おそらくちょうどこの頃、西突厥の正統な可汗の家系は途絶えており、その空隙を、唐では蘇禄 Su-lu と呼ばれた突騎施の支族の１つの首領が埋めることになった。彼は全部族を糾合し、自身は可汗と称した（p.81）。彼はその地位を確固とするために、はやくも紀元後 715年に中国の宮廷に使節を送り、唐から高い称号が与えられた（p.44）。彼は毎年使節を唐王朝に送ったり、あるいは彼自身が出向いたりといったことを続けた

が、その一方で、同時に不服従の不穏な兆候も示していた。中国の皇帝は宥和策を試みた（pp.45、81、285）。紀元後718年と719年、皇帝［玄宗］は蘇禄に、より偉大で素晴らしい称号を与えた[訳註19]；紀元後719年、皇帝は蘇禄に都としてスイヤブを譲り渡し、４番目の［安西四］鎮を焉耆（アグニ Agni、現代のカラシャール Karashahr）に移した；紀元後722年には高貴な生まれの突厥の女性を降嫁させたが、その女性には「交河公主」という名誉ある称号が特別に与えられた。これでも彼は満足せず、きわめて常識外れの振る舞いを続け、大食［アラブ人］や吐蕃［チベット人］と同盟し、新疆地区を襲撃した（p.82）。彼はさらに２人の女性、北突厥の可汗の娘と吐蕃の［ツェンポの］娘と婚姻を結んだ（p.45）。しかしながら、その調子は良すぎて長続きせず、738年に彼が脳卒中を引き起こした後、部下の１人によって殺害された（p.46、p.83）。部族は２つの集団に分裂したが、２つは黒姓突騎施と黄姓突騎施と呼ばれることがある。後者の可汗はスイヤブに腰を落ち着けたが、入り乱れた戦いが続いた（p.83）。

『［新］唐書』にあるスイヤブの記事には、蕃族（胡）の商人が近隣の国々からやってきてそこの町に一緒に住んでいたとある（p.120）。正確な年代は書かれていないのだが、おそらく８世紀前半についての言及であろう。この時代、胡 Hu は一般的に「ソグド人」を意味しており、そのなかには間違いなくゾロアスター教徒、そしておそらく仏教徒のソグド人、さらにネストリウス派のキリスト教徒、この場合はソグド人あるいはシリア人が含まれていたであろう。

蘇禄の殺害、あるいは何かほかの出来事が引き金となって、中国人はさらなる行動を起こし、紀元後748年には［北庭節度使の］王正見 Wang Cheng-chien がスイヤブを占領し「交河公主がかつて居住していた場所に大雲寺」を建設した（p.45、p.286）[訳註20]。これは、クズラソフによって発掘された仏教寺院（発掘リストの No. 2）であることはほとんど間違いないが、その寺院が長く存続することはとてもできなかっただろう[訳註21]。

北突厥「帝国」［突厥第２可汗国］は744年に崩壊し、反乱を起こしたウイグル［廻紇（かいこつ）］とバスミル［拔悉蜜（ばつしつみつ）］、カルルク［葛邏禄（かつらろく）］部族によって分割された。この状況に直面した突騎施は独立を維持することがほとんどできなかった。カルルクはしだいに西へと進み、766年頃にはスイヤブとその隣接した地域を占領した（p.286）。その間に吐蕃もまた興隆し、787年までに唐は安西四鎮の支配を完全に失った（p.114、脚注）。

我々の見地からするとさらに悪いことに、中国人は失った領土に対する関心を完全に失い、スイヤブのその後の歴史については、ムスリム［イスラーム教徒］の地理学者の著作のなかに散在する記事にほぼ完全に依存している。この時代にチュー川流域で起きた部族間の戦争が、766年以前のものと比べて、１つの地方に限られたものではなかったと考える根拠はどこにもない。カルルクは、ことあるごとに近隣の部族に襲撃され、８世紀に獲得した領土の一部を失ったということが知られている。しかしながら、カルルクは10世紀半ば頃までチュー川流域を実質的に保有し続けたようである。10世紀半ばには新たな民族の動きによってカラハン朝が成立することになった（Minorsky 前掲書、p.287 を参照）。*Ḥudūd al-ʻĀlam*［世界の諸地域］（Minorsky 前掲書）は983年に書かれたが、大部分はさらに古い資料にある情報を編集したものであり、そのなかでは、スイヤブが20,000人の住民を持つ村として言及されている[訳註22]。これは、実際に都市に住む人の人口ではなく、スイヤブを中心とする地域に住む人たちの人口だったようである[訳註23]。おそらくスイヤブすなわちアク・ベシム遺跡が最終的に荒廃したのは10世紀末以前のことであり、ごく少数の外来の居住者がその遺跡にとどまったようである。そのなかの１人が11世紀の半ば頃、戻ってくるつもりで寺院［第１仏教寺院］の廃墟に自分の蓄えを埋めたが、結局戻ってくることはなかったということであろう。

この遺跡でもっとも興味深い小型の発見物はコインである。それらは明確に区別できる３つのカテゴリーに分類される。

第１のカテゴリーは４枚の中国のコインからなっている。そのうち２枚は両方とも城壁で囲まれた都市のなかで発見されたものであり、開元通寶 K’ai-yuan t’ung-pao の銘が刻まれている[訳註24]。開元通寶は中国貨幣のなかでは唯一と言えるほど、年代決定に資する実用性がない；というのはこの銘が刻まれているコインは621年から927年の間に何度も発行されたからである[訳註25]。寺院［第１仏教寺院］の遺跡の「８世紀から９世紀」の層から見つかった１枚のコインには大暦元寶 Ta-li yuan-pao の銘が刻まれており、766年から769年の間に発行されたものである。それゆ

え想定される仏教寺院の歴史ときれいに一致している。[訳註26)] 最後のコインはキリスト教教会において、年代が特定できない上層で発見されたもので、乾元重寶 Ch'ien-yuan ch'ung-pao の銘が刻まれており、758年から760年の間に発行されたものであり、想定される教会［AKB-4］の歴史とかなりきれいに一致している。

第２のカテゴリーはカラハン朝のコインであり、15枚の単独［で出土した］コインと76枚の一括出土コインは寺院［第１仏教寺院］の上層から、それらからはぐれた１枚は城壁で囲まれた都市のなかで発見された。それら［コインの］状態は悪いものからひどく悪いものまでさまざまではあるが、年代はおおよそ1025年から1050年までのもので、明らかに「外来の居住者」の時代に属している。

第３の、そしてきわめて興味深いカテゴリーは、地元のコインであり、いわゆる「ソグド・コイン」の部類に属している。スミルノヴァ教授に導かれたソ連の貨幣研究者たちは、ここ10年でこれらのコインの型式に関するめざましい研究を行ってきた。手本とした中国のコインと同じく鋳造で、中心には方形の枠に囲まれた孔［円形方孔銭］がある；そして、それらには通常、刻印の一種（テュルク語ではタムガ tamğa と呼ばれるようなもの）、あるいはソグド語の銘、もしくはその両方が刻まれている。スミルノヴァはソグドのコインに関して一連の論文を発表しているが、そのうちでもっとも重要なものは以下のものに発表された論文である。*Материалы и исследования по археологии СССР*［*Materialy i Issledovaniya po Arkheologii S.S.S.R*］, vol. xv, 1950；*Эпиграфика Востока*［*Epigrafika Vostoka*］, iv, 1951, vi 1952, x, 1955；*Краткие Сообщения Института Истории Материальной Культуры*［*Kratkie Soobshcheniya Instituta Istorii Materialnoy Kul'tury*］, parts 55 and 56, 1954。アク・ベシム遺跡出土のコインは典型的なソグドコインであるが、ほかのものと比べるとかなり特徴的である。スミルノヴァの第１型式（以下参照）と同じコインは遠く離れた新疆の高昌で見つかっており、F. W. K. Müller の *Uigurica* Ⅱ, Berlin, 1911 p.95 に発表されているが、銘の読みは正しくない。遠く離れたところで見つかったもう１枚のコインはカシュガル出土で、同じ年に、ラドロフ Radloff によって *Alttürkische Studien* iv, Izvestiya Akademii Nauk, 1911 に発表されたが、Müller の読みとは違っていたがそれでいて銘の読みは正しくなかった。彼女［スミルノヴァ］の第２型式に分類される４枚のコインは、1939年にベルンシュタムによって、アク・ベシム遺跡のやや西方、彼がつねに古代のサリグ Saryg であるとみなしていた古代遺跡［クラスナヤ・レーチカ］で発見された；ベルンシュタムによって、そのうちの３枚の写真と解説が *Тюркологический сборник*［*Tjurkologicheskij Sbornik*］i, 1951 に発表されているが、その解説はあえて見逃すのが、彼に対対して親切というべきであろう。これらを除けば、これ［スミルノヴァの研究］はこれらのコインに関する最初の研究である。

城壁で囲まれた都市［シャフリスタン１］の内部で表採された単独のコインは、あたかも中国のコインを一方［の面］に、そして同定されていないソグドのコインをもう一方［の面］に押し付けて製作された鋳型で手作り風に作られている。これ以外については、スミルノヴァは暫定的に３つの型式に分類し、私としては不本意なのだが、年代とは逆の順にリスト化している。

第１型式、つまりもっとも新しいものは、片方の面に弓の形をした刻印がある。この面についてスミルノヴァは仮にオモテ面としているが、実際のところ私はウラ面であると考えている。そしてもう片方［の面］には、βγy twrkyš γ'γ'n pny つまり「神なるテュルゲシュ可汗［Türgesh qaγan］の銭［バギ・テュルゲシュ・カガン・パニ］」というソグド語の銘がある。スミルノヴァやシェルバクが指摘するように、支配者はトルコ人だが言語はソグド語である；twrkyš というつづりは Türgésh と発音されるが、それもソグド語的である；トルコ語なら、Türgesh という発音は twyrk's とつづられたはずである。これらは最高の技能で製作された立派なコインであり、おそらくスミルノヴァが指摘するように中国の職人によって作られた。非常に劣化したコインがあるため、直径は25㎜から31㎜、重さは 7.09g から 2.0g と異なっている。計18枚のコインは、ゾロアスター教徒の墓域を除くすべての遺跡において８世紀か９世紀、あるいは年代が不明な層から発見されている。[訳註27)]

第２型式は、第１型式と同じように、オモテ面（スミルノヴァの「ウラ面」）に、「神なるテュルゲシュ可汗の銭」という同じ銘が刻まれており、ウラ面には（第１型式のオモテ面とは異なる）刻印と銘が刻まれている。その銘は２つの単語からなってお

り、２番目の単語のγwβw［フヴ］「領主」[訳註28)]の読みは確実である。この単語は「（最高位の支配者ではなく）下位の支配者」という特定性の高い意味を持ち、他のいくつかのソグドコインにも現れる。[訳註29)]スミルノヴァの *Epigrafika Vostoka* の第６巻の論文を参照されたい。スミルノヴァは最初の単語を暫定的にtγwmšと読んでいるが、wとšの読みだけは確実であるとみなしている。これらは凹凸のある表面や不均整な外形をしたひどく質の悪いコインである。第１型式と比べるとより小さく、直径22㎜（ベルンシュタムの発掘品のうちの１つ）から16㎜、重さは2.52gから0.63gまでさまざまである。アク・ベシム遺跡で見つかった22枚のコインは、ほとんどがひどく錆びた状態であり、城壁に囲まれた都市の内部と教会址から出土した１枚ずつを除けば、すべて寺院址［第１仏教寺院］で見つかったものである。そのうちの２枚は寺院の建物から出土したもので、１枚は壁の１つの日干しレンガの塊[訳註30)]のなかに、そしてもう１枚は柱の下にあった。そのほかのものは床の上、原位置で発見された。

第３型式（もっとも古いもの）は、オモテ面に第２型式のものと類似した刻印、そしてtγwm’n’k γwβw［トグマナク・フヴ］と読める銘がある；ウラ面は空白である。これらのコインは第２型式のコインよりも小さく、質はさらに悪い。直径は13㎜から11㎜まで、重さは0.83gから0.25gほどの軽いものまでさまざまである。0.25gのコインは非常に劣化したコインであった。これまでに見つかった８枚はすべて寺院址［第１仏教寺院］の７世紀から８世紀（ただしこの寺院が実際に748年に建てられたものならば８世紀）[訳註31)]および８世紀から９世紀の時代の層のものである。

スミルノヴァは、考古学的な証拠に基けば、疑いもなく正しく、第３型式がもっとも古く、次に第２型式、最後に第１型式であり、これはまさしく銘そのものが示していることであると結論している。私はモスクワ［での］学会の期間中に彼女とこれらのコインについて話し合う機会を持ち、第２型式のウラ面と第１型式[訳註32)]のオモテ面の銘がともに同じ場所を示していること、そしてその地名は８～９世紀のトクマク[訳註33)]を表す形であるということで意見が一致した。したがって、Su-(Sui-)yehがアク・ベシム遺跡に比定されることは、前者（Su-(Sui-)yeh）で建てられたと伝えられる建物が後者（アク・ベシム遺跡）でクズラソフが発掘した建物に同定されるということによって証明される。[訳註34)]それと同じように、Su-(Sui-)yehがトクマクに同定されるというシャヴァンヌの考えは、これらのコインによって十分に証明されることになる。しかしながら、肝心の銘に関してはまだいくつか些細な問題がある。スミルノヴァは依然として、第２型式の銘の最後の文字は -γ というより -š のようであると考えている。しかしその一方で、tγwmγ という読み方もあり得ない訳ではないと認めている。その場合、tγwmγ と読まれる語は、トクマクをあらわすソグド語の正確な表記であると言える。例えば「娘」を意味する語である δūχt の古典的なソグド語での綴りは δγwt となっており、これにはソグド語によく見られる γ と w の音位転換が起きている。ちなみにソグド語の「古代書簡」で「娘」を表す語は δūχt のほうである。第２型式[訳註35)]の tγwm’n’k はソグド語の形容詞を形成する接尾辞 -’n’k をともなう単語であるように見えるが、これはおそらくトクマク Tokmak から派生した形容詞ではない。スミルノヴァは、正しい読みは tγwmγ’k［トグマガク］であろうと考えているが、この tγwmγ’k はトクマクの別の（そしてより古い？）語形であるといわれている。

こうしたことは、我々が知っているスイヤブの歴史とどのように一致するのだろうか。これから述べる説明より優れた説明は存在しないように思える。７世紀のある時点では、おそらく中国人がこの都市をそれほどしっかりと支配していなかった頃、その時代、スイヤブの現地の支配者は自分がγwβw以上の支配者であるとみなすことはしていなかった。それでもソグド本土の支配者たちのように自分のコインを発行するのが良いと考え、おそらくソグド人であったと考えられる現地の職人に、「トクマクの首領」という銘が刻まれている数種類のコインを作るよう命令した。711年以前であることは間違いないが、７世紀後半か８世紀前半のある時期に突騎施の大首長はカガンの称号を強奪した。そのとき可汗は「神なるテュルゲシュ可汗の銭」という銘が刻まれたコインを発行し、その事実を祝い、世に知らしめることにしたが、その際「トクマクの首領」という銘にわずかな変更を加え、コインのウラ面に移した。ここの第３型式[訳註36)]の説明は、より簡単で、絵を見るように明らかである。中国の皇帝は家臣に栄誉を与えたいと思うとき、中国の職人をその

者に奉仕させるために貸し与える習慣があることが知られている。例えば、北突厥の支配者であるビルゲ・カガン Bilge Kağan の兄弟であるキュル・テギン Kül Tégin の墓碑には、中国皇帝が墓を装飾するために宮廷画家の１人を送ったという事実が記録されている。中国皇帝が蘇禄に一連の大袈裟な称号を与え、王女をでっち上げて、その女性を婚約者にしたほかに、715年直後に専門的な貨幣鋳造に工人の長を蘇禄のところに派遣したと想定することはとても理にかなっているように思われる。この工人の長は、オモテ面に可汗の称号を、そしてウラ面には現地のγwβw の名を消して、テュルゲシュのタムガ Türgesh tamğa を刻んだ一連のコインを製造したのだろう。おそらく郊外区であろうが、さらに発掘を進めれば、これらのコインやそれ以前に発行された一連のコインが鋳造された場所を突き止めることができる可能性は大いにある。

ここで想定したコインの発行の順序は、コインの発掘地点の分布とみごとに一致している。もっとも早い時代のコイン［第３型式］は現地でしか流通しなかったもので、すぐに廃止されることになったが、数枚はまだ流通しており、寺院のなかで遺失物となった。次に発行されたもの［第２型式］はかなり一般的に流通したようで、ベルンシュタムが「サリグ」と呼ぶ都市まで伝わっていた。それらは748年にはおそらくまだ流通しており、２枚は寺院の建物に組み込まれ、そのほかのもの寺院のなかで遺失物になった。最後に発行されたコインである第３型式[訳註37]はさらに大きな評価を受けていて、天山山脈の反対側にあるコーチョー［高昌:トルファン］やカシュガル［疏勒］まで広まり、そのほかはスイヤブの都市の至るところで遺失物になった。

１つの貨幣学上の問題が残されている。蘇禄が中国人と不和になった８世紀初めから、カラハン朝がイスラームのコインをモデルとして自身のコインを製造し始めた10世紀後半までの間、スイヤブやチュー川流域の住民たちは、コインとして何を使っていたのだろうか。この問題は将来解明されるであろうが、ローマコインの供給がなくなった以後、イスラーム圏のディルハム［コイン］が出現する以前の６世紀から８世紀までの間、ロシアの人々がそうだったように、彼らはコインという通貨を持たずに何とかやっており、すべての売買を物々交換で行っていたのだろうと私は思う（В. Л. Янин［V. L. Janin］, *Денежно-весовые системы русского средневековья*［*Denezhno-Vesovye Sistemy Russkogo Srednevekov' ja*］, Moscow, 1956 を参照）。

註

１）この論文の要旨は、1960年８月にモスクワで開催された第25回国際東洋学者会議で発表された。

訳註

訳註１）この論文は、Л.Р. Кызласов, О.И. Смирнова, А.М.Щербак, Монеты из раскопок городища Ак-Бешим（Киргизская ССР）в 1953-1954 гг.［Monety iz raskopok gorodishcha Ak-Beshim（Kirgizskaja SSR）v 1953-1954 gg.］［1953年～1954年のアク－ベシム遺跡（キルギス共和国）の発掘で発見されたコインについて］で、３つの部分からなっている。それぞれの題名は Л.Р. Кызласов［L.R. Kyzlasov］, “Краткие археологические данные［Kratkie arkheologicheskie dannye］［簡潔な考古学的情報］”, pp.514-526; О.И. Смирнова［O. I. Smirnova］, “О классификации и легендах тюргешских монет［O klassifikatsii i legendakh tjurgeshskikh monet］［突騎施のコインの分類と銘文］”, pp.527-551; А.М.Щербак［A. M. Shcherbak］, “О чтении легенд на тюргешских монетах［O chtenii legend na tjurgeshskikh monetakh］［突騎施のコインの銘文の読みについて］”, pp.551-561 である。

訳註２）ここで触れられている城塞都市は「シャフリスタン１」、郊外区はかつて「ラバト」と呼ばれていた「シャフリスタン２」である。補図１～３を参照。

訳註３）「シャフリスタン１＝町＝城塞都市」と「シャフリスタン２＝郊外区」は、ともに長い壁で囲まれており、クローソンは、その壁で囲まれている場所を「防御された区画」と呼んでいる。

訳註４）クズラソフが発掘した「Ⅱ-P.1」と「Ⅱ-P.2」地点のことで、「層位的発掘」と名付けられている。なお、新たに付け直した発掘地点の番号は AKB-2a と AKB-2b である（山内和也ほか「2018年度アク・ベシム（スイヤブ）遺跡の調査成果」『帝京大学文化財研究所研究報告』第18集，2019，pp.131-203 の pp.201-202 を参照のこと、以下同様）。

訳註５）クズラソフが発掘した「Ⅰ」地点で、「第１仏教寺院」と呼ばれる遺構である。新たに付け直した発掘地点の番号では AKB-1 である。

訳註６）クズラソフが発掘した「Ⅲ」地点で、新たに付け直した発掘地点の番号では AKB-3 である。クズラソフは、当初、「погребальный комплекс［墓地複合体］」と呼んでいたが（Археологические исследования на городище Ак-Бешим в 1953-54 гг., Труды Киргизской археолого-этнографической экспедиции АН СССР. Т. 2., 1959, p. 230）、その後、「Манихейский погребальный комплекс［マニ教徒墓地複合体］」としている（*Городская*

цивилизация Срединной и Северной Азии: исторические и археологические исследования, Москва, 2006, p.314）。

訳註７）クズラソフが発掘した「Ⅳ」地点で、「キリスト教会およびキリスト教徒墓地」と名付けられた。新たに付け直した発掘地点の番号ではAKB-4である。

訳註８）クズラソフが発掘した「Ⅴ」地点で、新たに付け直した発掘地点の番号ではAKB-5である。クズラソフは、当初、「замок［城、砦］」と呼んでいたが（Археологические исследования на городище Ак-Бешим в 1953-54 гг., *Труды Киргизской археолого-этнографической экспедиции АН СССР.* T. 2., 1959, p.81）、その後、「Руины «башни молчания»［「沈黙の塔」の廃墟］」としている（*Городская цивилизация Срединной и Северной Азии: исторические и археологические исследования*, Москва, 2006, p.330）。

訳註９）かつては「ラバト＝郊外区」、そして現在ではシャフリスタン２と呼ばれているこの地区こそが、中国の唐王朝が建設した「砕葉鎮城」である。

訳註10）漢字の発音はGilesの辞書の方式で表記し、個々の漢字はGilesの辞書の中で与えられた番号で特定している。例えば「素」は10,348番であり、「葉」は12,977番である。

訳註11 カールグレンのいうAncient Chineseとは、隋唐時代の中国語、いわゆる中古漢語のことで、ここではカールグレンが『切韻』にもとづき再建した発音をKarlgren, Bernhard, Grammata Serica, Script and Phonetics in Chinese and Sino-Japanese", *Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities* 12, pp.1-471, 1940から引用している。suo-やsuâi-のハイフン（-）は声調（ここでは去声）を表している。なおカールグレンの再建形の改訂版はGrammata Serica Recensa, *Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities* 29, pp.1-332, 1957で、現在は一般にこちらを参照する。

訳註12）クローソンは、シャヴァンヌが「葉」の現代音をフランス式にcheとすることを疑問視している。そしてこの現代音Sou-che［素葉］Soei-che［砕葉］は，唐の時代の原語の推定発音Souj（クローソン式ならSuzh、発音記号では［suʒ］）を想定させるとシャヴァンヌが考えていることを暗に批判している。「葉」は日本の漢音でも、ヨウとショウがあるように、２種類の発音があったので、シャヴァンヌはショウの方を想定したわけである。

訳註13）天山山脈の支脈をなすキルギズ・アラトー山脈のこと。19世紀の中頃、アレクサンドル２世に敬意を表して名付けられた名称。

訳註14）現在では柔然はモンゴル系の言語を話していたとされる。

訳註15）クローソンは、突厥の原語はTürkü だと考えているが、日本では複数形の語尾-tで終わる原語、つまりTürküt が一般に想定されている。

訳註16）日本では通常「東突厥」と呼んでいるが、唐の時代に編纂された『通典』『旧唐書』では、西突厥と区別する表現として「北突厥」が使われている。本翻訳でも「北突厥」と表記することにする。

訳註17）異論はあるものの、648年に置かれた四鎮は、亀茲、于闐、疏勒、焉耆（カラシャール）の４つとされることが一般的である。そののち唐は、679年、スイヤブを占領した際に、焉耆の代わりとして砕葉鎮を置いた。詳しくは柿沼陽平「唐代砕葉鎮史新探」『帝京大学文化財研究所研究報告』第18集，2019，pp.43-59を参照。

訳註18）クローソンがクズラソフの概略図のどの点をもって王方翼が築城した砕葉鎮城に関する記述と適合すると理解したのは不明である。他方、上述のように、クローソンは、「遺跡は、事実上３つの区域に分かれて」おり、それぞれ「城塞都市」、「郊外地区」、「防御された区画」としていることから、王方翼によって建設されたのがシャフリスタン１の壁であると認識している可能性が高い。しかしながら、現在では、東西方向に隣接する２つの壁で囲まれた町のうち、東側に位置する町が王方翼によって建設された砕葉鎮城であることが明らかとなっている（山内和也ほか「2018年度アク・ベシム（スイヤブ）遺跡の調査成果」『帝京大学文化財研究所研究報告』第18集，2019，pp.131-203のpp.131-132を参照）。なお、王方翼が建設した砕葉鎮城については、柿沼前掲論文のpp.50-52を参照のこと。また吐蕃の中央アジア進出と安西四鎮の消長については森安孝夫「吐蕃の中央アジア進出」（『東西ウイグルと中央ユーラシア』名古屋大学出版会 2015, pp.132-229）が有益である。

訳註19）718年には左羽林軍大将軍、金方道経略大使、719年には忠順可汗などの称号を与えた。

訳註20）この記述は誤りである。『通典』辺防９石国条本注所引の杜環『経行記』砕葉国条には以下のように記されている（柿沼前掲論文、p.52）。「砕葉国は・・・・また砕葉城がある。天宝７年［748年］に、北庭節度使の王正見が征伐し、城壁は砕き壊され、邑居は荒廃した。むかし交河公主［阿史那懐道の娘。722年に玄宗が封じ、突騎施の蘇禄可汗に嫁ぐ］が『居止』されたところで、大雲寺が建てられており、まだ残存している」（［　］の部分は柿沼による補足）。要するに、『経行記』の記事「昔交河公主所居止之處、建大雲寺、猶存」の「建大雲寺」をこのときに建築していたとみるか、それ以前に建築されていたとみるかの解釈の違いである。シャヴァンヌは前者の解釈を採用し、クローソンはそれに従ったわけだが、武后による大雲寺の設置に関する歴史的な背景を考慮すれば、後者のように解釈せざるを得ないということである。なおこの点に関してはA. Forte, “Chinese state monasteries in the seventh and eighth centuries,”桑山正進『慧超往五天竺國傳研究』（改訂第二刷）京都，臨川書店，1998，pp.239-49も参照せよ。ただしForteは、第１仏教寺院を大雲寺の遺跡と考えている。

訳註21）「発掘リストの No.2」というのは、上述の発掘地点の説明において２番目に挙げられているという意味であり、クズラソフが付けた発掘地点番号（I）には対応していない。なお、砕葉鎮城に建設されたとされる「大雲寺」は、クズラソフが発掘した「第１仏教寺院（AKB-1）」ではなく、ベルンシュタムが発掘したシャフリスタン２に位置する仏教寺院であると推定される。詳しくは、川崎・山内「ベルンシュタムによるアク・ベシム遺跡シャフリスタン２の発掘調査」『帝京大学文化財研究所研究報告』第19集，2020，pp.215-245 の pp.215-218 を参照されたい。

訳註22）同書では以下のとおり記されている（Minorsky 1982, p.99）。「17章．トゥフス Tukhs の土地とその諸町。その東はチギル Chigil との境界である；その南はハルルク Khalluk［カルルク］と彼らが訪れる山々（kūhistān-hā）；その西はヒルヒーズ khirkhīz［キルギズ］の集団；その北はチギル。この土地は、チギル（のそれ）よりとても快適（nāḥiyatī-st bisyār-ni‘mattar）である。そこから麝香とさまざまな毛皮（mūy）がもたらされる。かれらの財産は、ウマ、ヒツジ、毛皮、テント、そしてフェルトの小屋である。冬（dimistān!）と夏には、彼らは放牧地、牧草地、草地（charāgāh-va-giākhwār-va-mar-ghazār）に沿って歩き回る。１．LĀZINA（？）と F.RĀKHIYA（？）はトゥフスの２つの氏族（qaum）で、それぞれ小さな土地を持っており、彼ら２つの部族に因んだ名前の２つの村がある。２．スーヤーブ SŪYĀB、大きな村で、20,000 人の男たち［兵士］を出す。３．ビーグリーリグ BĪGLĪLIGH（「ベグの家来たちの家」）は、大きな村で、ソグド語では S.m.knā と呼ばれる。その領主（dihkān［原文のまま］）は Y.nālb.rr.kin（* イナール－ベグ－テギーン *Yināl-beg-tegin）と呼ばれている。3,000 人の男たちが彼とともに出陣する（bā ū …bar nishīnand）。４．ウールカス ŪRKATH は、トゥフスの２つの村の間にある。わずかな人たちしかそこに住んでいないが、（その場所は）快適で、住民は豊か（tuvāngar）である」。ミノルスキーは、「مرغزار」を「mar-ghazār」として「meadows［草地］」と英訳しているが、この語は「margh［牧草地］」と「*zār*［所］」からなる複合語と考えるのがより適切であることから、「mar-ghazār」は「margh-zār」の誤植であろう。

訳註23）ミノルスキーによるスイヤブに関する注釈については、Minosrsky 1982, p.303 を参照のこと。

訳註24）ここでいう「城壁に囲まれた都市」はシャフリスタン１を指す。

訳註25）927年がどんな年なのか分からない。開元通宝は、玄宗の年号の開元（714～741）とは無関係で唐の時代を通じて流通していたことはよく知られている。唐が滅びる907年の誤植か。

訳註26）ただし、クローソンはこの寺院、つまり第１仏教寺院が大雲寺で、748年に設置されたと誤解していることには注意されたい。ちなみに大雲寺の設置は690年からそう遠くない時期である。

訳註27）「ゾロアスター教徒の墓域 the Zoroastrian burial area」は、都市遺跡の西にある「Ⅲ＝ AKB-3」地点を指しているものと思われる。クローソンは AKB-3 に関し、「ゾロアスター教、あるいはそれと同じような儀式に基づき」と述べていることから、この遺構を「ゾロアスター教徒の墓域」とみなしたようである。実際のところ、中央部の施設はゾロアスター教徒の葬送儀礼に関連している可能性が高いことから、このクローソンの指摘は蓋然性が高いものといえ、今後の再検討が必要である。

訳註28）吉田豊「貨幣の銘文に反映されたチュルク族によるソグド支配」『京都大学文学部研究紀要』57, 2018, pp. 155-182 にはこの貨幣の銘文の読みが論じられている。吉田は wn’ntm’x xwβw「領主ワナントマーフ」と読んでいる。なお γwβw は xwβw［フヴ］の古い時代の転写法である。

訳註29）ソグドのコインに現れる称号には xwβw = MR’Y「領主」以外に MLK’（= ’xšyδ）［イフシード］「（帝）王」がある。

訳註30）ここでは、*pisé-de-terre* block を「日干しレンガの塊」と訳したが、パフサと呼ばれる「練り土ブロック」の可能性もある。

訳註31）上述のとおり、クローソンは杜環の記述に基づき、北庭節度使の王正見が 748 年に「大雲寺」を建設したと考えていることから、ここに見られるような記述となっている。

訳註32）これは第３型式の誤植であろう。

訳註33）クローソンとスミルノヴァが銘の一部に「トクマク」を指す地名が含まれているとみなしていた点については、後述の吉田による補説を参照。

訳註34）クローソンは、クズラソフが発掘した「第１仏教寺院」が「大雲寺」に同定されることから、アク・ベシム遺跡がスイヤブ、つまり砕葉あるいは素葉に同定されるとの結論に達している。しかしながら、「大雲寺」は、ベルンシュタムが発掘した「第０仏教寺院」に同定されることから、この前提は誤りであるといえる。このように前提には誤りがあったものの、アク・ベシム遺跡がスイヤブに同定されるという結論は正しいものであった。

訳註35）これは第３型式の誤植であろう。

訳註36）これは第１型式の誤植であろう。

訳註37）これは第１型式の誤植であろう。

補説：クズラソフKyzlasovが発掘したコインの年代と歴史的背景に関するクローソン Clausonの解釈の問題点とコインに関する研究のその後の展開

はじめに

本論文でクローソンは、アク・ベシム遺跡においてクズラソフが発掘したコインのスミルノヴァによる研究成果と、シャヴァンヌが翻訳した西突厥関係の漢文史料を利用して、アク・ベシム遺跡が漢文史料に言う砕葉鎮（玄奘の素葉城）であることを証明しようとしている。クローソンがこの論文を発表した背景には、アク・ベシムが、戦前にここを発掘したベルンシュタムによって、カラハン朝の首都バラサグンに比定され、それがソ連邦の研究者によって定説化していたということがあった。いずれにせよクローソンの結論は一般に支持され現在に至っている。日本では護雅夫がこの研究を利用しつつ出土貨幣に関する自身の見解を発表し（「いわゆるトゥルギシュの銅銭の銘文について」『古代チュルク民族史研究Ⅱ』東京, 1992, pp.187-199）、アク・ベシム遺跡の歴史的変遷を一般向けに解説したこともあって（『古代遊牧帝国』中公新書 437, 1976, pp. 186-202）、アク・ベシム遺跡が砕葉鎮に比定されることは東洋史の研究者にはよく知られている。唐の時代の砕葉鎮が現在のトクマクあたりにあったことはシャヴァンヌが既に指摘していたところであるが、この付近にはいくつかの都市遺跡が存在しており、その遺跡が特定できたことの意義は極めて高いと言える。

しかしながらこの論文を見る限り、出土コインの銘文にトクマクの名前が読み取れるという主張に基づく彼の証明の手続きには大きな問題があったことが分かる。この点は、訳注においても指摘されているが、ここではそれらのコインの写真も参照しながら、詳しく解説することにする。さらに、コインの相対的な年代についても検討する。ここで提示する写真は平野伸二氏所蔵のコインを撮影したものであり、クズラソフの発掘品ではない。クズラソフが発掘したコインの写真はスミルノヴァの論考で提出されているが、コインの保存状態がよくないだけでなく写真も鮮明ではない。同じ型式の保存状態の良いコインの写真を提示する意義も大きい。これらの写真を提供下さった平野伸二氏に感謝するものである。さらに内藤みどり教授が吉田に委託されたコインのコレクションの中にも同じ型式のコインが存在しており、帝京大学文化財研究所の藤澤准教授は現在それらの成分分析を行っている。

1．銘文の読み

ソグド文字の銘文が存在するのは、スミルノヴァが突騎施コイン（テュルゲシュ・コイン）と突騎施グループ（テュルゲシュ式コイン）と呼ぶものである。翻訳では突騎施コインは第１型式、突騎施グループは第２および第３型式である。クローソンそしてそれに従う護雅夫は、第１型式が最も新しく、第３型式が最も古いと考えている。大きさ／重量は順に小さくなる。クローソンがまとめているように、スミルノヴァの計測によれば第１型式：25㎜～31㎜／7.09g～2.04g、第２型式：22㎜～16㎜／ 2.52g～0.63g、第３型式：0.83g～0.25g ／ 13㎜～11㎜である。出土枚数は第１型式：18枚、第２型式：22枚、第３型式：８枚である。第３型式は仏教寺院遺跡［第１仏教寺院］でのみ発見されるが、第１型式では18枚中、仏教寺院で７枚、都市（シャフリスタン１）内部で７枚、キリスト教教会で４枚発見された。第２型式では、仏教寺院で20枚、都市内部で１枚、キリスト教教会で１枚発見された。

第１型式、第２型式の一方の面には同じ銘文が見える。ソグド文字の現在の翻字（転写）方式では、以下のように読める。1980年代以降、ソグド文字では文字 x と γ は異なる文字で合流していなかったことが知られていて、区別して翻字される。

βγy twrkyš x’γ’n pny「神なる突騎施可汗の銭」

この銘文の βγy「神」の意味について護雅夫は詳しく論じている。要するに βγy の原義は「神」であるが、王や首領など支配者の美称としても使われ、その場合には「主」の意味として使われることが問題になっている。これは同じ単語が多義になっているということである。トルコ語の tängri も含め類似の現象は他の言語でも見られるが、ソグド語では βγ- の意味の「インフレ」は著しく、一種の敬語として一般に使われるようになっている。「銭」を意味する pny は、かつては漢語の「分」からの借用語と見なす説も行われたが、現在は梵語の paṇa（小銭）からの借用語であることが知られている。

第１型式の突騎施のコインのウラ面には半円の弓形のタムガが見られるが、第２型式では、別のソグド語の銘文と小型のタムガが見られる。ちなみにこれら３つの型式のコインのタムガはスミルノヴァの論文では541ページに再現してあり、それは護雅夫の論著でも引用されている。クローソンが問題にしている第２型式の銘文は、スミルノヴァによれば

tγwmš γwβw <tamgha>

である。γwβw というソグド語は、現在は xwβw と表記されるが、xwt'w と同義語で、「王、領主」を意味する。アラム文字の訓読語詞（ideogram と呼ばれる）では MR'Y と表記される。支配者を表すソグド語には別に 'xšyδ と表記される語がある。この語の訓読語詞は MLK' であることが知られている。８世紀初めのペンジケント王(領主)デーワシュティーチュは、当初は pncy MR'Y「パンチの領主」と呼ばれているが､最晩年サマルカンド王を自称していて、その時の正式な称号は sγwδyk MLK' sm'rknδc MR'Y「ソグドの王にしてサマルカンドの領主」であった。このように 'xšyδ = MLK' は xwβw/xwt'w = MR'Y の上位の支配者の称号であった。アク・ベシム出土のソグド語銘文の称号が 'xšyδ ではなく xwβw の方であることにもクローソンは注意を喚起している。歴史的にみれば、ソグド地方がエフタルの支配を脱して以降､サマルカンドの領主は同時に「ソグドの王」の称号を名乗ることになったようだ。コインでは７世紀初めの šyšpyr 王が最初であり、８世紀半ばの twrγ'r 王まで続いた。政治的な混乱が続いた 720 年頃のサマルカンド領主は 'wr'kk であったが、このとき東隣のオアシス国家であるペンジケントの領主であったデーワシュティーチュもサマルカンドの領主を名乗ったのであった。なお xwβw/xwt'w の称号を持つ土侯たちはイスラーム史料ではペルシア語の dihqān で呼ばれているようである。彼らは、必ずしもオアシス国家の王ではない。逆に言えば、そういう複数の土侯の中からオアシス国家の首領（王）が選出されていたということになる。

第３型式は、片面にはソグド語の銘文とタムガがあるが、裏面は空白である。銘文は、スミルノヴァによれば

tγwm'n'k γwβw <tamgha>

である。スミルノヴァは、tγwmš は twγmγ の読みも可能であり、tγwm'n'k も tγwmγ'k と読むことが可能であるとする。実際、ソグド文字の草書体では文字 γ/x と文字 š はよく似た形式になる。同様に、'n という２文字の文字列は、文字 γ/x の１文字とよく似ている。

クローソンはスミルノヴァに従い第２型式の tγwmγ と第３型式の tγwmγ'k は Tokmak トクマクという地名を表すと考え、γ（ここでは無声音の x に対応すると考える）と w の順序の違いは、ソグド語に頻繁に見られる w と γ の転移現象によって説明できると考えた。また tγwmγ'k の方はバリアント形かより古い形式だとしている。アク・ベシム出土のコインに Tokmak という地名が見られることから、Tokmak が砕葉鎮城であるとする説に従えば、アク・ベシムが砕葉鎮城であるという結論になる。

２．第２型式と第３型式の銘文の読みのその後

本論文中に紹介されている第１型式、すなわち突騎施のコインの銘文の読みは、基本的に正しくその後も変更はなかった。しかし第２型式と第３型式のコインの銘文の読みは、この後改訂案が提出されている。

ソ連時代にソグド語圏で発見されたコインに関する総合的な研究としてはスミルノヴァによる *Сводный каталог согдийских монет*［*Svodnyj katalog sogdijskix monet*］, Moscow 1981 があり、彼女の研究の集大成であった。この研究書には第２および第３型式のコインの新しい読みと解釈が提出されている（pp.59–61, 405–412, 写真 pp.494–495）。そこでは第２型式の銘文を tγwsš γwβw と読み、第３型式を tγws'n'k(?) γwβw と読む。そして第３型式の銘文を「tuxusskij γwβw（Tukhus の領主）」と翻訳している。一方第２型式の銘文を「obshchetuxusskij γwβw（全 Tukhus の γwβw）」と翻訳している。彼女はこのコインに見えるタムガについても論じており、漢字の「主」に似ているとしている。彼女の読みをソグド語文法の点から解説すれば、tγws'n'k は tγws に、形容詞を派生する接尾辞 -'n'k を添えた形式だが、tγwsš の -š は説明できない。スミルノヴァは twrkyš の類推によって -š が添えられたと考えているように見える。

スミルノヴァは､彼女が tγws'n'k と読むその語を、10世紀のイスラームの地理書の *Ḥudud al-'Ālam* に、チュー川流域に居住していたとされる Tukhs 族と関

連付け、第２、第３型式のコインを Tukhs コインと呼んだのであった。そしてこれらのコインが Tukhs 族に関する最も古い記録であるとさえ言っている。その際、第１、第２、第３型式の相対年代は、古い考えを踏襲し第３型式が最も古く、次に第２型式、最後が突騎施コインと見なす。これらのコインの出土状況から、その後の研究者は彼女の年代論を支持してはいないが、Tukhs コインという名称はその後も使われ続けている。

吉田は 2000 年に発表した論文 “First fruits of Ryukoku-Berlin joint project on the Turfan Iranian manuscripts”, *Acta Asiatica* 78, 2000, pp.71-85 において、トルファン出土の10世紀のマニ教ソグド語文献の奥書に現れる人名に wn’ntm’x という人名を読み取り、その同じ名前が第２型式の銘文に見られることを明らかにした。これは内藤みどり教授から提供された保存状態の良いコインに基づいていた。ルリェ P. Lurje は *Personal names in Sogdian texts,* Vienna 2010 において筆者の読みを支持している。旧ソ連邦における研究に詳しいルリェが引用する先行文献における銘文の読みには twxm’x、wγ’tmnk、p’tm’s、tγ’wms、wγ’tmns、w’γwm’s、wγ’tmyš、wγtm’y、p’tmyš のような転写が提案されていた。その最後の３件は次に論じる Thierry の読みである。

しかしこれ以降も読みは確定した訳ではなくティエリー F. Thierry は “Three notes on Türgesh numismatics”, in: Shanghai Museum（ed.）, *Proceedings of the symposium on ancient coins and culture of the Silk Road,* Shanghai 2011, pp.413-442 において、３種類の名前（wγ’tmyš、wγtm’y、p’tmyš）を読み取り、この問題を検討している。このうちの wγtm’y は第３型式の銘文である。ティエリーは、これらはチュルク語の人名であり、蘇禄以降に登位したトゥルギシュの可汗の名前だとしている。彼によれば、質の悪いことや、発見される場所の広がりがチュー川流域に限定されていることから、彼らが支配する地域は広くなくその支配力は蘇禄にとうてい及ばなかったという。筆者と読みは異なるものの、突騎施コインの後に発行されたコインであると認識していることは注目されよう。この年代観は、ビシュケクの古銭商であり、キルギスを代表する古銭学者でもあるカミシェフ A. Kamyšev も共有している。彼はコインの製造技術や重量が劣化することを根拠に、スミルノヴァとは全く逆の相対年代を考えている。この点は我々も同じ意見である。

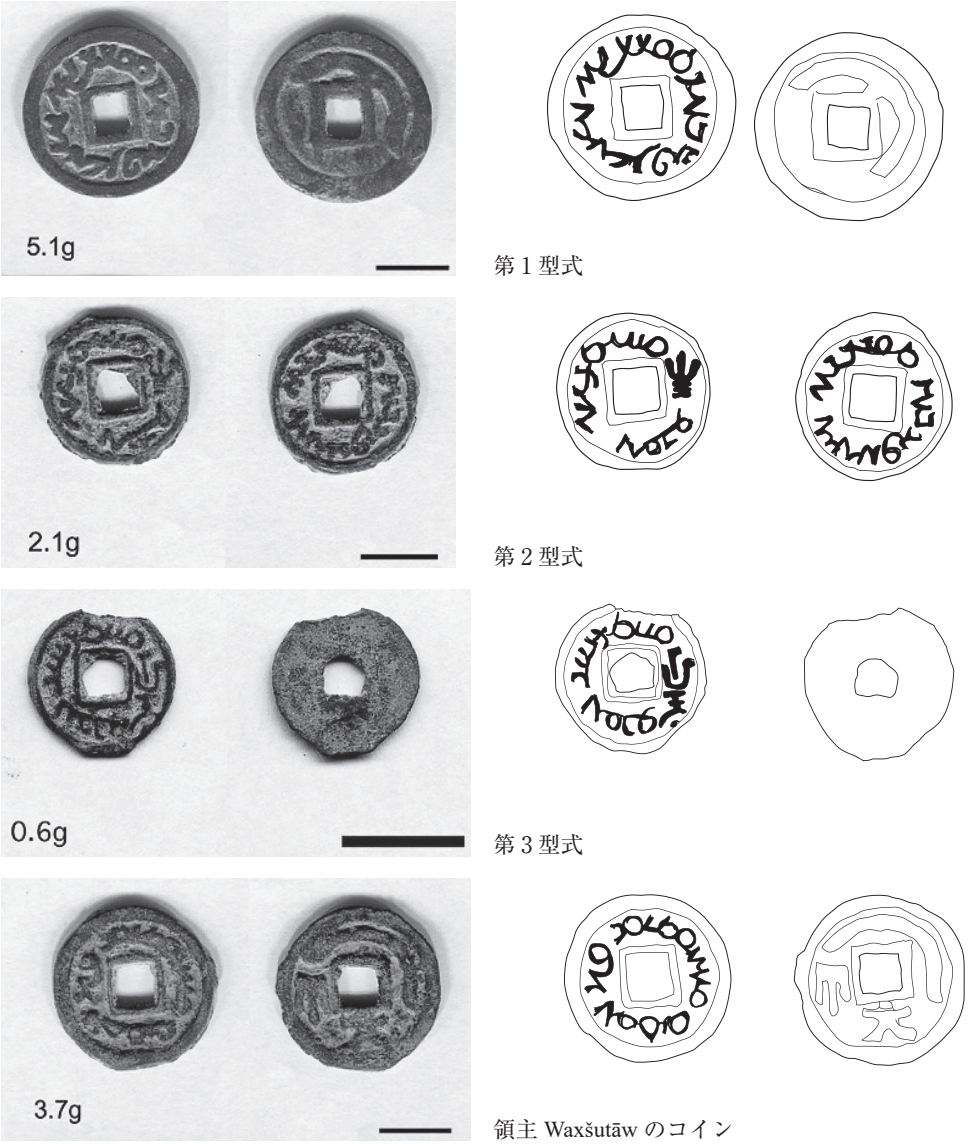
吉田はその後2018年に「貨幣の銘文に反映されたチュルク族によるソグド支配」『京都大学文学部研究紀要』57, 2018, pp.155-182 を発表し、チュルク族が支配する地域で発行されたソグド語の銘文を含むコインを扱う中で、再度この問題を扱った。その際は平野伸二氏のコレクションにある第３型式のコインの銘文の読み（wnntm’xy xwβw）も提出した。wnntm’xy は斜格の語尾を伴っているが、これは「領主 Wanantmākh の（コイン）」というほどの意味であろう。第２、第３型式のコインに関するこの論文での吉田の結論は、「おそらく、蘇禄以降弱体化したトゥルギシュの緩やかな支配下にあった、ソグドの都市国家の支配者が発行したコインであったのだろう」というものであった。

おわりに

質と重量を考慮すれば、第１型式の突騎施コインはティエリーが考えるように、突騎施の最盛期、蘇禄可汗の時代のものと考えるのが妥当である。第２、第３型式はその後数十年の間に発行された可能性が高いだろう。とりわけ第３型式には「突騎施可汗の銭」という銘文さえなくなっていて、突騎施の支配が終わっていたことを示唆する。このことは、それらが出土した第１仏教寺院の年代が、８世紀から９世紀初めにかけてのものであることを強く示唆するように思われる。クローソンは漢文史料を読み誤って、ここが大雲寺であり、748年に建てられたものと考えていた。訳注でも述べたように、第１仏教寺院は大雲寺ではあり得ないが、その年代観はこれまた偶然正しかったことになる。さらに出土コインの状況が類似するセミョーノフ Semenov 発掘のシャフリスタン１内部の巨大なキリスト教教会も、８世紀後半の設立と考えられよう。ちなみに第１仏教寺院でも、このキリスト教教会でもカラハン朝のコインも出土しているが、それらはクローソンが第１仏教寺院のカラハンコインについて推定するように、ここが放棄された後の時代の一時的な居住者のものである可能性が高く、出土するカラハン朝のコインに基づきセミョーノフが、城内のこの教会を 10世紀から11世紀と見なすことは再考を要しよう。またシャフリスタン１の外、東側にある８世紀とされるクズラソフが発掘したキリスト教会と、セミョーノ

フが発掘した城内の教会との関係も考究されなければならない。

チュー川流域で発見されるカラハン朝成立以前のコインについては、どのようなコインが何処でどれほど出土しているかの情報が日本では得にくい状況にある。一例を挙げると、現地の情報に詳しいカミシェフによれば、コインの片面に突騎施の弓形のタムガを備え、もう一方の面に xwt'w wxšwt'wy pny「領主 Waxšutāw の銭」という銘文があるコインはタラス地域で発見されるという。スミルノヴァは上掲書において、このタイプのコインを突騎施可汗の第１タイプと呼んでいる（pp.397-398, 493, no. 1585；なお吉田、上掲論文、pp. 159-160 でも論じている）。これも突騎施の支配が弱体化した後のコインであったのだろうが、発行したのはスイアブではなく西方のタラス地方のソグド人領主であったようだ。このように今後は現地の出土状況を踏まえた研究が急務である。（吉田　豊）



第１型式

第２型式

第３型式

領主 Waxšutāw のコイン

平野コレクションのコイン